

もくじ
 開館30周年 足立区の遺産の継承 1P 弘法大師御詠歌 二十一首 2P
 北千住発地方視察「実業視察団」参加募集案内について 3P



昭和44(1969)年 中央図書館郷土資料室の展示室 場所は今の梅田図書館の一室。

足立史談

第584号

2016年10月15日

足立区教育委員会

足立史談編集局

足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(28-308)

11月1日で開館30周年 足立区の遺産の継承

郷土博物館「アラサーみゅーじあむ」展の開催

■郷土資料室 その後、『新修足立区史』の刊行をきっかけに、昭和四十四(一九六九)年に誕生したのが中央図書館郷土資料室でした。郷土博物館の前身で現在の梅田図書館の一室にありました。長く活動を続け、昭和六十一(一九八六)年十一月一日に、その役割を引き継ぎ当館

郷土博物館は今年の十一月一日に開館から三〇周年を迎えます。そこで、まず博物館の開館へのあゆみをたずねます。

■展覧会 足立区の遺産の展覧会は、はじめ特設会場で行われていました。戦前の昭和九(一九三四)年には区内の新聞社が主催して「郷土教育資料 足立区名宝展覧会」が千寿第二尋常小学校を会場に開催されています(詳細未詳)。戦後の昭和二十七(一九五二)年には当時編さんされていた『足立区史』(昭和三十・一九五五年の刊行)に合わせ、当時の区議会議事堂で「足立区史料展覧会」が開かれました。同書にその目録があり数多くの資料が記載されています。公開は成功しましたが、資料保存は進まず、いくつかの遺産は、現在、行方不明となっています。



河鍋暁斎 能楽図屏風より
 狂言大黒連歌 河鍋暁斎記念館のご協力で評価が確定した。

(郷土博物館)

が開設されました。

■資料保存 博物館の最も重要な役割は貴重な遺産を将来に伝えることです。その機能を果たすため、博物館では何が貴重な遺産なのか、そして収集するべきかを探っています。近年、注目される美術や歴史資料の大多数は、区民の皆さんとの連携で見えられ、専門家・他館の協力を得て評価し、展覧会で公開しています。

■遺産の継承 開館した頃には狩野派の作品の伝来や、琳派絵師と谷文晁一門の絵師が交流する舞台だったことも未解明で、戊辰戦争の関連資料もその存在が知られているのみでした。しかし多くの方のご協力で、資料の解明や発掘が進み現在は全国的に知られるようになりました。遺産の発見と継承をご紹介します展覧会を開館記念日の十一月一日から開催します。詳しくは広報・チラシ・インターネットをご覧ください。

弘法大師御詠歌 二十一首

小川 政 秋

『弘法大師御詠歌集』(函館中央図書館所蔵・国文学研究資料館デジタルデータ所収)は、宝暦九(一七五九)年発行の和本で、弘法大師御作と伝わる二十一首の御詠歌が、「大坂二十一ヶ寺」と共に書かれている。「大坂二十一ヶ寺」は、宝暦三(一七五三)年に開創された二十一ヶ所参り最初の霊場といわれるものである。

ここで御詠歌は、漢字まじりで書かれており、第六番の前の行に「○是れより六字念佛哥といふ」との注記があり「なむあみたふ」の音にそれぞれ「南無阿弥陀佛」の一字をあてはめた御詠歌が六首続く。(一覽参照)この六字念佛哥は、「江戸六阿弥陀」の御詠歌にも見られる。

更に、台東区の有形文化財の一つに、寛政二(一七九〇)年開版の「弘法大師二十一ヶ寺御詠歌所附」版木があり、『台東区有形文化財報告書第二十三集』に収録されている。大坂で『弘法大師御詠歌集』が出版されてから僅かに三十一年で、江戸で同じような本が出版されたのである。

この版本の御詠歌は、全て平仮名で表記されており、全て『弘法大師御詠歌集』の御詠歌と同じ御詠歌を

収録している。ただ残念ながら、台東区の文化財報告書では、巻末の「弘法大師二十一ヶ寺・御詠歌一覧表」で漢字まじりに書き直し、異なる表記にしてしまったため、『弘法大師御詠歌集』とは意味の異なる御詠歌と見えるので、注意が必要である。弘法大師二十一ヶ寺は以下の通りである。

■弘法大師二十一ヶ寺一覽

札番 札所名 所在地

- 一番 圓滿寺 文京区湯島一
 - 二番 多寶院 台東区谷中六
 - 三番 大乘院 台東区元浅草四
 - 四番 清光院 (廃寺：下谷)
 - 五番 地藏院 台東区元浅草一
 - 六番 不動院 台東区寿二
 - 七番 仙蔵寺 台東区寿二
 - 八番 大徳院 墨田区両国二
 - 九番 龍福院 台東区元浅草三
 - 十番 自性院 台東区谷中六
 - 十一番 吉祥院 台東区元浅草二
 - 十二番 成就院 台東区元浅草四
 - 十三番 観蔵院 台東区元浅草三
 - 十四番 正福院 台東区元浅草四
 - 十五番 西光寺 台東区谷中六
 - 十六番 威光院 台東区寿二
 - 十七番 密蔵院 中野区沼袋二
 - 十八番 本智院 北区滝野川一
 - 十九番 長久院 台東区谷中六
 - 廿番 延命院 台東区元浅草四
 - 廿一番 靈雲寺 文京区湯島二
- (十七、十八番は移転後の住所)

「弘法大師二十一ヶ寺」については、『東都歳事記』(天保九・一八三八)の附録として観音・地藏など各地の札所を列記したものにあげられており、「○弘法大師二十一ヶ所参 未詳。湯島靈雲寺に弘法大師廿一所の内廿壹番とあり。」とのみ記されている。

この霊場内でその後、廃寺や移転となった寺院は三ヶ寺にすぎず、別に「御府内二十一ヶ所」とよばれる札所もあるが、同じ寺院はわずかに七ヶ寺と少なく、札番まで同じ寺院は一ヶ寺なので、全く別の霊場と考えたほうが良いだろう。

関東地方に残る二十一ヶ所霊場の記録の中には、やはり寛政年間の開創とされる霊場もあるが、「弘法大師二十一ヶ寺」が関東地方での二十一ヶ所参り最初の霊場と推定する。

東葛二十一ヶ所の札所市川市市川の観音寺の大師堂にかかる扁額には「東葛二十一ヶ所第一番霊場」として第二番の御詠歌が書かれているが他の二十一ヶ所霊場に残る扁額は、札番だけか、あるいは同じく弘法大師作と伝わる御詠歌を書いたもので、『弘法大師御詠歌集』「大坂二十一ヶ寺」の御詠歌はあまり伝承されていない。

■大坂二十一ヶ寺弘法巡り

札番 札所名 所在地

- 一番 不動寺 豊中市宮山町
- 二番 太融寺 北区太融寺町
- 三番 宝珠院 北区与力町
- 四番 興徳寺 天王寺区鶴差町
- 五番 観音寺 天王寺区城南寺町

忘れても 汲やしつらん旅人の 高野の奥の玉川の水
法性の 室戸といへど我すめば 有為の波風よせぬぞなき
山たかき 谷の朝きり海に似て 松ふく風を浪にたとへん
かくばかり だらまを知る君なれば たゞぎやた迄もいたるなりけり
いふならく 奈落迦の底に入りぬれば せちりもすだもわかれざりけり
○是れより六字念佛哥

南によりも 佛りぬる身こそ南げかるれ 佛たゞびわかく南らぬものゆへ
無かしより 陀のみしことは無やくなり 陀だひとすちに無漏に入へし
阿ぢきなき 弥をすてこそ阿の世まで 弥だのひかりを阿きらかにみん
弥るひとの 阿りやなしやに弥ゆるかな 阿はれはかなき弥をいかにせん
陀ちまらに 無らさきくも陀なびきて 無かへたまはれ陀れかとまらん
佛みもみん 南がらのはしも佛りにける 南にはのことも佛りみならずみ
中なかに 人里ちかくなりにけり あまり深山のおくをたづねて
世の中は 風に木の葉のうらおもて となれかくなれかくなれとなれ
かへるとて むなしかるまし日のしるし 玉とはちすの光きえねば
にこり江に ひとたびおちば瀧川の すむとももの清きには似ず
此のほどは 後世のつとめもせざりけり 阿字の二字の清きにまかせて
まよへるも さとるもわれにあるなれば 發心すなほは至るなりけり
三界は たびのやどりのごとくなり 一心はこれものと居ところ
たまたまも 此の峯よつともがらは そのいにしへのえにし悦べ
空海は 虚空の定に入ものを 心せばくも穴とみるかな
阿字の子が 阿字のふるさと立出て 又立かへる阿字のふるさと

*「大坂市」は省略した。

札所の成立年代については、不明なものが多い。大阪と江戸、二ヶ所に残されたこれらの資料は、「二十一ヶ所参り」の成立を考えるうえでの貴重な資料である。

札番 札所名 所在地 御 詠 歌

一番 不動寺 豊中市宮山町

忘れても 汲やしつらん旅人の 高野の奥の玉川の水

二番 太融寺 北区太融寺町 法性の 室戸といへと我すめば 有為の波風よせぬ日ぞなき

三番 宝珠院 北区与力町 山たかき 谷の朝きり海に似て 松ふく風を浪にたとへん

四番 興徳寺 天王寺区餌差町 かくばかり だらまを知れる君なればた、ぎやた迄もいたるなりけ

五番 観音寺 天王寺区城南寺町 いふならく 奈落迦の底に入りぬればせちりもすだもわかれざりけり

六番 四天王寺 天王寺区四天王寺南によりも 佛りぬる身こそ南げかるれ 佛た、びわかく南らぬものゆへ

七番 藤次寺 天王寺区生玉町 無かしより 陀のみしことは無やくなり 陀だひとすぢに無漏に入へし

八番 宗恵院 天王寺区生玉前町 阿ちきなき 弥をすて、こそ阿の世まで 弥だのひかりを阿きらかにみん

九番 持宝院 (不詳) 弥るひとの 阿りやなしやに弥ゆる

かな阿はれはかなき弥をいかがせん 十番 法案寺 中央区島之内 陀ちまちに 無らさきのくも陀なびきて 無かへたまはれ陀れかともらん

十一番 持明院 天王寺区生玉町 佛みもみん 南がらのはしも佛りにける 南にはのことも佛りみふらずみ

十二番 曼荼羅院 (持明院に合併) 中なかに 人里ちかくなりにけり

十三番 青蓮寺 天王寺区生玉寺町 世の中は 風に木の葉のうらおもてとなれかくなれかくなれとなれ

十四番 醫王院 (青蓮寺に合併) かへるとて むなしかるまし日のしるし 玉とはちすの光きえねば

十五番 正祐寺 天王寺区上本町 にごり江に ひとたびおちば瀧川のすむともとの清きには似ず

十六番 櫻本坊 (不詳) 此のほどは 後世のつとめもせざりけり 阿吽の二字のあるにまかせて

十七番 観音院 (正祐寺に合併) まよへるも さとるもわれにあるなれば 發心すなはち至るなりけり

十八番 報恩院 中央区高津 三界は たびのやどりのごとくなり 一心はこれもとの居ところ

十九番 自性院 中央区中寺 たまたまも 此の峯よづるともがらは そのいにしへのえにし悦べ

廿番 三津寺 中央区心斎橋筋 空海は 虚空の定に入ものを 心せ

ばくも穴とみるかな 廿一番 宝城寺 藤井寺市北條町 阿字の子が 阿字のふるさと立出て 又立かへる阿字のふるさと

*「大阪市」は省略した。(葛飾区在住)

明治四十五年北千住発 地方視察「実業視察団」 参加募集案内について

相川 謹之助

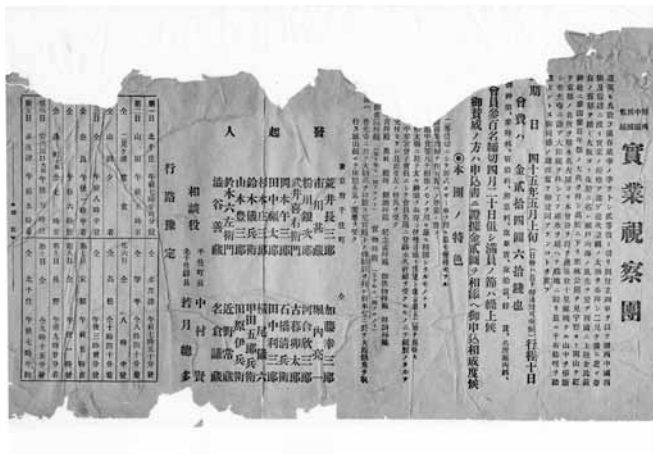
足立史談583号(9月15日発行)で掲載された佐藤貴浩氏の「明治四十五年北千住発地方視察の思い出」について、当時の実業視察団の募集資料(写真参照)が手元にありますので紹介させていただきます。

募集の主題は関西、中国、四国、信越、実業団視察団で、その募集の趣旨は、以下の通りです。

*本文意訳、カッコ内は筆者記入

花笑い鳥歌う陽春の最も幸せの季節となりました。貳等借り切り別立立ての列車を以て関西中国四国及び信越に渡り、実業の視察を遂げ途次皇祖の大廟を奉拝し二見ヶ浦に遊び奈良の旧都を踏み大阪より汽船に乗り瀬戸内海の風光を愛で四国に上陸金毘羅神社参詣三百年歳の大典を拝し、高松に下り栗林公園を見、宇野

より岡山を経て京都の名所を尋ね名古屋より木曾路を経て連峰数十里、曲がりくねった蛇のような山中を横断して善光寺に詣で、大開帳を押し予つて碓井を越え郷地に帰り、ここに千有余里を踏破します。御同感の諸彦奮つてご賛同をあらんことをこひねがふ



◎ 本団の特色

二等車借り切にて新式ボギー車を用い最も優待をする。医師、看護婦を伴い万一の準備を尽くす。

宿泊中食等すべて相応のものを用品最も精選したるものなり。伊勢大廟に於いて大太神楽を奉奏し伊勢音頭を供覧し微古館五二館を視察する。

琴平参宮正会員にして会員名簿に登録永久祈禱を受けるものにて銀製メダルを交付せられ且つ此度の特典を愛く。

上部欠損

本宮拝殿、奥社殿拝、御酒拝戴、紀念盃拝戴、御供物拝戴、拝詞拝戴

御書院拝観 (五十年に一回アルノミ) 宝物拝観 (五十年に一回アルノミ)

本団は善光寺に於いて大勸進を拝観する。尼宮殿下の御勸請を拝し御本堂に於いて大施餓鬼を執行する。城山館にて休憩茶菓子の饗応を愛く。

発起人

東京府千住町

荒井長三郎 (橋戸町・武蔵屋、薪炭問屋)

市川甚蔵 (橋戸町・材木商か?)

粉川銀次郎 (河原町・粉川葛餅店)

武井喜右衛門 (河原町・佐野屋、青物問屋)

岡本午三郎 (河原町・谷塚屋、青物問屋)

問屋

田中福太郎 (仲町・鳥福、諸鳥鶏卵問屋)

杉本庄三郎 (仲町・鎌倉屋、小間物化粧品)

鈴木儀兵衛 (仲町・大谷、酒類問屋)

山本豊三郎 (仲町・鈴木商店・寝具婚礼具)

鈴木六左衛門 (仲町・明治の仲町郵便局局長)

渋谷善蔵 (仲町・川善、米穀問屋)

加藤幸三郎 (仲町・鈴幸、米穀問屋)

堀内亮一 (仲町・堀内医院、医師)

河合欣三郎 (一丁目・河合白酒醸造元)

古暮卯三郎 (北千住駅前・古暮運送店?)

石橋清兵衛 (不詳)

田中利三郎 (北千住駅前・マル北田中運送店社長)

横尾儀六 (三丁目・中田屋、貸座敷業)

甲田五郎兵衛 (三丁目・米穀問屋)

田原伊兵衛 (四丁目・えんま寿司料理業)

近野常蔵 (四丁目・増田屋、醤油店)

名倉謙三 (五丁目・骨接ぎの名倉、医師)

(伊勢宇治)(二見ヶ浦)(伊勢大神宮橋)(伊勢内宮)

第三日 山田 午前八時半発

奈良 午後一時半着 (春日神社山門)(三笠山)休憩(奈良)

奈良 午後六時発

大阪 湊町 午後七時着

第四日 大阪 安治川口、午後五時発 (乗船加茂川丸、鉄製旅客船)

第五日 多度津 午前八時四十分着

多度津 午前七時四十分着 (讃岐金毘羅神社及び奥社)(琴平宮額堂)

第六日 琴平 八時半発

高松 十時四十分着 (栗林公園)

高松 午後三十分発高松港

大井川丸乗船(六六十トンの貨客船)安芸宮島、宮島千畳閣、安芸

殿島、千畳閣及び五十塔 広島市浅野泉邸、広島城 (広島を夜行で出発京都へ?)

第七日 京都 午前七時着

嵐山、清水寺(その他観光か?)

第八日 京都 午後一時発

第九日 長野 午前九時二十分着 (車中から木曾の溪流を眺望か?) (善光寺参詣)

第十日 長野 九時十五分発

■募集案内より見えてきたこと

現在は旅行会社で団体旅行の計画は作成から実施まですべて行ってくれるが当時これだけの団体旅行は發起人の力が必要だったでしょう。發起人の人々は千住の商人をはじめ名士であります。「募集の趣旨にご同感の諸彦奮ってご賛同あらんこと」とあるから男性を募集したのかと思つたら十日間の旅行に女性も参加しているのには驚かされました。

参加費用が二十四円六十銭は現在の旅行会費に換算すると幾らになるでしょうか、参考までに当時コメ一俵六十キロ生産者価格六円十六銭です(米価年代表による)

客車は二等車(この時代一等車から三等車まであった)で借り切り新式のボギー車で利用しています。ボギー車とは客車の長大化につき一台の客車に車軸が二個の台車を取り付けてあり、カーブの曲がりがよく安定度が高い。明治後半より多く使用されました。

万一に備え医師、看護婦を同行しており、宿泊先の旅館、食事は良いものを厳選しています。行程は十日間だが二日ぐらい余計にかかったのではないかと思われれます。

この明治四十五年七月三十日に明治天皇が崩御して明治時代が終わりました。この実業視察団旅行が秋に行われる予定であればおそらく中止になったと思われれます。

(足立史談会 役員)